

三島由紀夫『孔雀』覚書

——小説技法より見た読解を中心に——

高 場 秀 樹

一、はじめに

二、事件記事との比較

三、「塵」について

四、刑事の造形

五、対応関係という文法

『孔雀』（『文学界』 一九六五〔昭四〇〕・二）を素材となつた事件記事と比較することで、その技法について考察してみたい。1、作中の「脅迫電話」の機能について。2、野犬の習性について。3、「2」の語りについて考察し、刑事の機能を追求する。4、作品の対応関係、特に「遠吠え」という語に着眼して、細君の意味を考察する。

一、はじめに

『孔雀』（『文学界』一九六五〔昭四〇〕・二）が横浜ドリムランドという遊園地で起きた孔雀惨殺事件を素材としている事は既に久保田裕子氏が「美の転位―三島由紀夫『孔雀』論―」（平成四年三月『人間文化年報』お茶の水女子大）で報告されている。他にもこの作品について言及している文章は見られるが、当然ながらそれら全ては、この作品の内実に迫った文章である。しかし、事件記事と比較してみると大小様々なずれが見られる。それらのずれは作品の内実に関わるものもあるが、中には、小説の技法にかかわる部分もある。本稿ではこうした、事件記事とのずれを考察することで、この作品の小説技法について覚書風に記述してみる。

二、事件記事との比較

先に述べたように事件の報道記事と作品を比較すると、様々なずれが見られる。これからそのずれを幾つか取り上げ、小説における「必然性」と「一般性」の問題について分析してみたい。最も大きな違いは「5」節（以下「1」節）という言い方は『孔雀』の節を指す。）で設定される「囹捜査」であるが、他にも細部に様々なずれが見

られる。まず「脅迫電話」を取り上げ、小説の必然性について述べたい。

「小説とは何か」（『波』一九六八〔昭四三〕・五―一九七〇〔昭四五〕・一一）は題名とおり、三島が自己の小説観を述べた文章で、三島自身の死によってその連載が中断されたものである。文中、E・Mフォースタアを引き合いに出し、プロットについて述べた件がある。

・プロットとは小説における必然性であるが、劇においては必然性が十分高尚なものになりうるのに、小説では、必然性が小説を卑しくすると考へられるやうになるのである。因みに、ストーリーとプロットの差について、E・M・フォースタアが、すこぶる簡潔な定義を挙げてゐるが、フォースタアによれば、ストーリーとは、「王妃が病んで死んだ。一ヶ月後に王が死んだ」といふ事実の列挙であり、プロットとは、「王妃が病んで死んだので、悲しみのあまり、一ヶ月後に王が死んだ」といふ、複数の事実の必然的連結だといふのである。

ここではプロットに関して述べられているが、小説においては、プロットに限らず、「必然性」といった要素が重要

になる。小説で描かれたある事柄（事件、設定など）に関して、その事柄がそうであるべき必然的な根拠が提示されなければならぬ。この必然性の担保というべきものの提示を怠ると、作品は事柄を羅列した年代記風の記述に墜ちてしまう。

『孔雀』において、M遊園地の孔雀が二回目に襲われた時、その事件の概要が「4」節で語られるが、次のような設定はなぜなされたのか。

・遊園地がふたたび孔雀を買ひ揃へて披露したのが十五日のことであるが、十八日の朝、孔雀どもは又襲はれた。

（略）十五日前後に怪電話があり、俺は孔雀を殺した者だが、五十万円持つて来ないと、もう一度やるぞ、といふ脅迫の声を伝えてゐた。

この「怪電話」に関しては、久保田氏も指摘しているところ、実際に新聞でも報道されている。

・社長宅へ脅迫電話も

（略）

松尾国三社長の東京都港区赤坂青山南町六の一六の自

宅に五日よる脅迫電話がかかっているので、クジャク惨殺事件との関連を調べている。

（『サンケイ新聞』 昭和三九年一〇月一八日「夕刊」）

作者はこのような脅迫電話のエピソードを事実として存在したからという理由で、作品に採用したのであるか。否。そもそもこの「孔雀惨殺事件」にまつわる事実は、無数にある。作者がただ事実であるが故に、このエピソードを採用したというなら、採用されなかった事実が無数にあるという事実はどうなるのか。そこには選択があり、選択には基準がある。それは作品内において何かしらの機能を担い得るかどうかという基準であるはずだ。

ではこの「脅迫電話」はどのような機能を担っているのだろうか。

「4」節で刑事は事件が一応野犬の仕業ということを決着した事を富岡に報告しに行くのだが、刑事はそこでまだ捜査を行うことを富岡に告げる。

・「ありや、結論をいふと、野犬の仕業だとわかつたんです。（略）まあ、いろんな点で、獣医さんの説明があまり見事なので、野犬説に決りました。もつともま

だ囹捜査はやるつもりですが…」

「野犬説に決まりました。」と断定しているにもかかわらず、何故、まだ「囹捜査」をしなければならぬのか。結論を先に言くと、この理由こそが「脅迫電話」の事実があったからに他ならない。つまり、野犬の仕業で一応の決着がついたにもかかわらず囹捜査が行われるには、まだ僅かながら人間による犯行の可能性が無ければならないのである。その僅かな可能性こそが「脅迫電話」のエピソードなのである。作者は囹捜査という設定を必然化するためにこのエピソードを採用したのだ。

しかも、先に挙げた新聞記事と作品の該当箇所を比較すると、いかに作者が厳密な設定を行っているかがわかる。新聞記事には「脅迫電話がかかっている」とだけあり、脅迫の内容までは報道されていないが、作品では「五十万円持つて来ないと、もう一度やるぞ、といふ脅迫の声を伝へてゐた。」と脅迫の内容が営利目的であり、しかも、その請求の金額が「五十万円」と設定されている。何故単に人間による犯行の中でも特に営利目的という設定にしたのか。

人間による犯行と言えば、富岡も同様である。「そんなことは決してありません。人間がやつたに決つてゐます。」

人間でなくて、どうしてこんなことを思ひつくといふんです。犬なら犬でもいい。しかしそれは人間が犬を使つてやつたことに決つてゐる。さうぢやありませんか。人間が巧く犬を使つたんですよ」と人間による犯行であることを主張して止まない。しかし、富岡の主張においては、同じ人間でも営利目的のような実利的な動機ではない。それはこの場面以前に既に語られていた、孔雀が殺される場面の夢想からもわかる。囹捜査の動機を脅迫電話という実利的な営利目的の事柄にしたのは、こうした富岡の非実利的な美的な動機とは異質なものである事を確認しておく為ではないのか。

さらにその請求金額が「五十万円」とされているのも意図的である。第一回目の事件を報道した記事（昭和三九年一〇月四日、朝刊）で、『東京新聞』には殺されたインド孔雀は「二歳半―三歳」で「一羽約三万円」とあり、『神奈川新聞』では「二歳から二歳半」で、これも「一羽約三万円」と報道している。また、『サンケイ新聞』では「生後一年半くらい」で「大きくなれば一羽十数万円もする」とある。「一」節で一回目に殺される「印度孔雀」の数は「二十七羽」であるから、一回目の孔雀惨殺のみでおおよそ当時の額で八十万円程の損害になる。二回目は当然この延長と考えられるので、「脅迫電話」の主からしてみれば、

もう八十万円程損害する位なら「五十万円」で済ましたらどうか、ということであろう。この金額の計算には「脅迫電話」が単なるいたずらだと簡単に片付けられない信憑性がある。これだけの信憑性がある金額の請求だと、人間の犯行である可能性が完全には否定できなくなる。だからこそ、警察は、野犬の仕業とほぼ断定しながらも、囃捜査を続行するのである。

しかも、「脅迫電話」の時間設定である。先に挙げた報道記事によると脅迫電話は「五日よる」であるのに対して、作品では「十五日前後」となっている。「孔雀を買ひ揃へて披露したのが十五日のことである。」とその直前にあり、「脅迫電話」の時期を「十五日前後」にすることで、孔雀購入から披露までの時間に「脅迫電話」の時間を合わせた事がわかる。新聞（『日経』、『毎日』、『サンケイ』、『神奈川』、『東京』、『朝日』、『讀賣』、『昭和三十九年一〇月一八日の朝刊、夕刊』）や週刊誌（『サンデー毎日』）によると、孔雀の購入に関してはばらつきがあるものの、おおよそ昭和三十九年十月十日から十五日の間に二回から三回に分けて方々から、購入したり寄贈されたりしている。例えば『東京新聞』の報道では次のようになっている。

め、十日に静岡県三島市営の「楽寿園」（長谷川泰三市長）から二羽、十三日に東京都豊島区長崎町葉商事川康氏から二羽、十五日に福岡県久留米市の「鳥類センター」（太田竜止園長）から二十羽と生き残りの一羽のうち二十三羽で、二羽だけが助かった

（一九六四「昭三九」・一〇・一八 夕刊）

これらの報道から判断すれば、作者は孔雀の購入時期をおおよそ事実なりに扱ひ、その辺りに孔雀の披露を設定した。そしてその前後に「脅迫電話」の時期を設定したと判断できる。では、孔雀の購入、披露の前後に「脅迫電話」の時期を設定したのは何故か。報道にある五日だと、「十月二日の未明」に起こった第一回目の事件の事後といった感があり、その事件が起こつてすぐに再度、孔雀を購入、披露するのは、五日の時点では、まだ未定と考えるのが普通である。そのような時期に起きた脅迫電話が果たして、どれほどの信憑性を持つのであろうか。また、五日だと孔雀の購入、披露が十五日で、披露から十日前に脅迫電話が行われたということになる。内容上関係があつても、時期が離れすぎているために、二回目の事件との関連が希薄になる。ひいては、その「脅迫電話」そのものが単なる一回目の事件後の便乗やいたずらにすぎないと思われてしまう。

・この事件（引用者注・一回目事件）は全国の関心を集

いずれにしても、二回目の孔雀購入、披露の時期に「脅迫電話」の時間を符合させたのは、この「脅迫電話」と第二回目の事件が密接な関係にあるように設定し、「脅迫電話」の信憑性を高めるためだと言えよう。

このように、「脅迫電話」の信憑性を高めるために、その内容が営利目的であることや、その請求金額、時間が厳密に設定されていることがわかる。「脅迫電話」の信憑性が高まれば、孔雀殺しが人による営利目的の犯行である可能性が残り、ひいては捜査をしなくてはならない必然性が出てくるのである。

次に取り上げたいのは野犬の習性である。「5」節で刑事事は孔雀惨殺事件が野犬の仕業であり、一応は事件が解決した事を富岡に知らせに来る。そこで、刑事は野犬の習性を富岡に説明する。

・「野犬は又、飼犬とちがつて、最初は一匹で襲撃してきて、回を重ねるにつれて仲間をふやし、習性として、まづ必ず土を掘るのですが、孔雀小屋の金網の下を掘つて、侵入した形跡があります。まあ、いろんな点で、獣医さんの説明があまり見事なので、野犬説に決りました。」

ところが、奇妙な事に、『週刊朝日』の記事では次の様子が書かれている。

・また「加害者」については野良犬の大きなやつで、まづ目的物に向つて直進、そこにあった金網をかんて開いた。もしこれが不可能だともう一步高度な方法として土を掘る。一般にいわれている「犬は土を掘る」というのは間違いですという。

作品では犬はまず最初に土を掘るのであるが、記事ではまず最初に金網を噛んで破る。それが不可能であると、次に土を掘る、となっている。ここで注目すべきは、「一般にいわれている『犬は土を掘る』という科学的には誤りである説を作者が設定したという点である。作者は正に「一般にいわれている」俗説を設定したのだ。実際のところ、一回目の事件を報道する他の記事を見渡しても、現場に犬の掘った穴があるという報道は皆無である。

おそらく、ここに表現の一般性という問題が潜んでいる。我々読者全てが野犬はまず「金網をかんて開」き、「不可能だ」とその次に「土を掘る」、という習性を承知しているわけではない。こうした科学的事実⁽¹⁾は専門家のみが承知している（現実の一回目の事件においてもこの事実があま

りに専門的であるが故に警察が野犬の仕業という説を見逃した)。ところが、この作品は動物学者に向けて書かれているわけではなく、一般の読者に向けて書かれているのであり、一般の読者はむしろ俗説の方にリアリティーを感じるのである。ここで、小説にとってリアリティーというのが一般性に根ざしているという事が分かるであろう。作者が敢えて科学的には間違いである説を設定した理由はそこにあると思われる。

こうして見てきた小説の必然性や一般性こそが作品のリアリティーを保証するのだ。

三、「塵」について

このように作者は細心の注意を払って作品の設定を行っている事がわかる。それは「2」節で展開される刑事の富岡家来訪の場面にも見られる。

例えば、「塵」。刑事が最初に富岡家に訪れ、応接間に通されたときに茶が出される。

・卓の上ではさつき刑事のために出された茶が冷え、驚
いるの水面をこまかく縫ひ取つたやうに塵が浮んでゐ
た。永く掃除をしたことのないこの部屋では、いつも
しづかに塵が零りつづけてゐるらしかった。

先ず前提として注意しなければならないのは、この場面の語りである。「その装飾がふつうの常識とはどこことなくがってゐるのを感じた。」という冒頭の一行によつて「2」節は三人称でありながら刑事の視点(特に刑事の感覚)で語られることが予告される。

引用箇所は二つのセンテンスからなるが、眼目は後者である。そして、後者が「零りつづけてゐるらしかった。」と推定表現になつており、その推定の根拠が前のセンテンスで示されるという構造になつてゐる。塵は塵でも、降り積もつた塵ではなく、刑事がいるへ今ここに現在進行で降り続いている塵でなければならぬ。人間である刑事の肉眼では、そのような塵は見えない。純粋な第三人称の所謂神の視点なら、へ今塵が降つてゐる」と根拠無しで断定して差し支えがないが、肉眼でしか物を見ることができない刑事を通してでは、せいぜい推定が限界なのである。

推定をするのであれば、その根拠を提示しなくてはならない。その根拠が「さつき刑事のために出された茶」(傍点筆者)に浮ぶ塵である。では、何故その根拠が「さつき刑事のために出された茶」(傍点筆者)でなければならぬのか。例えば、何故、刑事が座つてゐる前の卓の上に塵が積もつていた、という事をその根拠にしてはいけぬのか。

か。

刑事が来る以前から富岡の応接間にあるもので塵を描いても、〈塵が降り続けている〉ということを描いたことにはならない。なぜならその塵は刑事が来る以前に降り終わった塵であるかもしれず、〈今現在〉は既に塵は降っていないという事もあり得るからだ。つまり、刑事が来る以前は降っていたが、今は降っていないという可能性も考えられる。刑事が来ている〈今現在〉も塵が降っている事を描くには刑事が来た後に出された物でその根拠を提示しなくてはならない。しかも刑事が来てから出された物でもその出された時点が〈今現在〉からずっと以前であれば、これも〈今現在〉は降っていないという可能性が残るために、茶が出されたのは「さつき」でなければならぬのである。さらに、見えない塵ということでは湯気の立っている温かいお茶よりも湯気がなく冷えた茶の鮮明な水面の方がよいのである。

このように「2」節は、刑事の感覚で語られており、語り手は〈刑事を語っている〉のではなく、〈刑事として語っている〉。したがって、ここに描かれる事象は、刑事という人間の肉体機能を通して見聞されたものでなくてはならない。換言すれば、その見聞には人間の肉体的生理機能の範囲内という制約が設けられることになる。

四、刑事の造形

こうして、いかに作者が厳密に設定しているかを見てきたのであるが、見方を変えたと、作者はこのような厳密な設定をしてまで（刑事という人間の肉体的な生理機能の範囲内という制限を設けてまで）、この場面の語りを刑事の視点にする必要があったとも言える。何故なのか。

引用箇所のみならずこの「2」節全体が刑事の視点で貫かれおり、この語り手の姿勢は富岡の年齢に関する叙述に関しても同様である。

「2」節の最初の一行は、「刑事は富岡家の大きな古い応接間にとほされて、その装飾がふつうの常識とはどことなくちがつてゐるのを感じた。」であるが、のつけから傍線部のように刑事の応接間に対する感覚的な印象から始まる。これはこの「2」節全体が刑事の肉体的感覚を通して語られることを予告する。刑事は待たされる間、応接間の装飾品を見てまわるのであるが、そこで、問題の美少年の写真に遭遇する。

・それは十六七歳の少年の写真で、スウェーターをゆるやかに着て、このあたりの林らしい雑木林を背景に立つてゐる。ちよつと類のないほどの美少年である。

語り手が純粹な第三人称であるなら「十六七歳」などと年齢を曖昧にする必要はない。ここにも刑事の感覚を通した語りの姿勢が現われている。この直後富岡夫妻が応接間に入ってくる。そして刑事と対面するのであるが、このとき刑事は写真の美少年が「現在」の富岡と同一人物であるとは気がつかない。刑事から見た富岡は次のようなものである。

・富岡は奇立つた様子も見せず、静かにしてゐる。カシミヤの薄茶のカーディガンを引っかけて、椅子に深く身を沈めた姿に、落着きとゆとりが見える。むしろ学者肌に見えるその感じに、刑事は予断を裏切られたが、四十五歳ぐらゐのその顔が、ひどい荒廃をあらはしてゐるのにも気づいた。

・一面から云ふと、富岡の顔を四十半ばでこんなにも荒廃させたものは、他ならぬその教養であるかもしれない。

注意すべきは、「現在」の富岡の年齢も刑事の感覚を通して、曖昧にされているということだ。何の意図もなく刑事

の感覚を通した語りにこだわるのなら、このままで終わればよい。しかし、次のように、刑事の視点の外で正確な年齢を提示されるのは何故なのか。

・「これはどなたです」

富岡の死んだやうな目は、このときはじめて、一瞬間から跳ね上つた魚鱗のやうな煌きを放つた。

「私です」

「え？」

「私ですよ。十七歳のときの写真です。うちの庭で父が撮ってくれたのです」

ここで始めて、刑事は先の美少年の写真が少年時代の富岡であることを知る。また、刑事が「このあたりの林らしい雑木林」と判断した写真の場所も、「うちの庭」であることが富岡自身から知らされる。と同時に、刑事が「十六七歳」と判断した年齢も富岡自身の「十七歳のときの写真です。」という発言により、ほぼその推定が正確であることがここにおいて証明されるのだ。

「現在」の富岡の年齢に関しても同様である。もっとも、この場合は刑事の視点で語られる「2」節以前で既に純粹第三人称の語りにより正確な富岡の「現在」の年齢が提示

されている。

・富岡は晩婚であつた。四十歳で結婚し、そのあくる年に生れた娘は四つになつた。

傍線部から計算すると〈現在〉の富岡は四十五歳ということになる。「四十五歳ぐらゐ」、「四十半ば」という刑事の判断もやはりほぼ正解であることがここでも解る。

こうした視点の操作は要するに刑事の人相判断の能力がかなり優れていることを示しているのだ。

しかし、その刑事の熟練した「職業的判断」能力をもつてしても、写真の美少年が〈現在〉の富岡であることに気づくことはできなかったのである。

・刑事はしつかり礼儀を守らうと心に決めてきてゐたから、笑ひもせず、愕きも隠したけれども、さう思つてつらつら見ると、正にそれは富岡の少年時代の顔にちがひなかつた。ただ、職業柄あればど人相に詳しい自分、今までこの写真と富岡との相似に気づかなかつたのはいかにもふしぎである。

(略)

しかし、今の富岡には怖ろしいほど嘗ての美が欠け

てゐる！ 美が欠けてゐるといふだけのことが、さうまで刑事の職業的判断を狂はせたのはふしぎなことだが、その欠け方が徹底的で、尋常でないのだ。

ここで注意すべきことは熟練した刑事の「職業的判断」の能力は、「職業的」であつて、つまり、それは実利的、実務的能力であるという点だ。強いて言えば、「職業柄あればど人相に詳しい自分」とある、「あれほど」とは、まさに年齢を人相から正確に推定できるほどという意味であろう。そんな刑事をもつてしても何故、現在の富岡と写真の美少年が同一人物である事に気が付かなかつたのであるうか。それはとりもなおさず、「美が欠けてゐる」からであつた。「美が欠けてゐるといふだけ」(傍点筆者)という表現には美を職業という有用的な要素よりもはるかに軽んじている姿勢が見られるが、これも刑事の視点であることを忘れてはならない。ここには刑事の美に対する姿勢が現れている。たかが美如きの問題が、それまで自負していた自分の職業的判断が狂わされたその事自体が「不思議」なのである。不思議という感情は、いままで体験したことのない状況に遭遇したとき、自分の価値基準の枠を越える何かに遭遇し、判断できない感情である。彼はあくまで職業的な有用な側にいる人間であり、美に関わる判断ができな

い人間なのだ。

五、対応関係という文法

三好行雄はかつて『金閣寺』を論じた際⁽⁸⁾、この作品の特徴の一つとして、「伏線とそれの頭在化した事件との過不足ない対応関係に、構成上の意がもつとも多くそがれた」と述べた。『孔雀』においてもこのような技法上の特徴が見てとれる。こうした対応関係を厳密に設定されていることは、例えば、作中に出てくる「月」のイメージを見れば分かる。一九六六年版の横浜ドリムランドのパンフレットによると、「5」節に出てくる「宇宙旅行館」に該当する施設は「月世界探検館」である。この変更はおそらく作中の「月」という語の対応関係を厳密にするためであろう。余計な夾雑物を作中に混入すれば、対応関係の厳密さが崩れるというわけである。

そうした対応関係の中でもここで採り上げたいのは「遠吠え」である。

ところで、富岡と細君の関係を見ると、対立関係ではなく、むしろ能楽のシテとツレのように、ある種、順接の関係であることが解る。したがって、双方には類似点が多い。美の喪失という点においても共通している。

・富岡は長身で痩せ形であるが、細君はオペラ歌手にならうとしただけあつて、肥り肉で、むかしは輪郭の鮮明な、花やかな顔立ちであつたらうに、その輪郭が崩れ、しかも小鼻や唇の角に強いくつきりとした線が残つてゐるので、鬱陶しい、威圧的な感じを与へる。

ここで注意すべきは、むかし花やかな顔立ちであつた細君は同時にかつてオペラ歌手を志していたということである。

・富岡は晩婚であつた。四十歳で結婚し、そのあくる年に生れた娘は四つになつた。大柄な妻は、オペラ歌手にならうとしてゐたのが、三十を越してから断念して、間に口を利く人があつて、富岡と結婚したのである。

つまり、オペラ歌手を目指していた事と美しかった（「花やか」であつた）事はある種、重なっている。このことは次の箇所からも解る。

・細君はいふと、はじめはあんなに高圧的であつたのに、訊問が良人に移つてからは、不快さうに顔をそむけて押し黙り、しかも座を立たうとはしなかつた。彼女は地味なスーツを着て、諸事身なりにかまはない風

に見えた。オペラ歌手を志した女にはとても見えない。

「地味」である事が、「オペラ歌手を志した」風には見えないなら、「地味」の逆である「花やか」である事は「オペラ歌手を志した」事と矛盾しない。ここまで来れば、細君のかつての外面的な顔の美しさ（「花やか」さ）は「オペラ歌手を志した」という事の外化である事が解るだろう。「オペラ歌手を志」さなくなったから、顔面が「花やか」で（美しく）無くなったわけである。そしてそれは、先に引用した箇所に「オペラ歌手にならうとしてゐたのが、三十を越してから断念して、間に口を利く人があつて、富岡と結婚した」とあるように、「オペラ歌手」を断念した結果、富岡と結婚したと解釈できる。したがって細君が「花やか」で（美しく）無くなったのは結婚後ということになるだろうか。

結婚後、細君は「オペラ歌手」を「断念」したが、まだ、名残惜しいらしい。

・鳴つてゐるのはピアノの音である。二階の妻の居間から、その音が遠くひびいてゐる。娘の眠りをさますのを怖れて、富岡が何度か禁めたのに、いつかなきかない妻は、不機嫌な夜にかぎつて、こんな風にピアノを

叩きながら、衰へた自分の咽喉を試すのである。その遠吠えがピアノにまじつて悲しげにきこえる。あの高すぎる美しい声が四方へ放たれ、夜ふけの藪のざわめきの間を、どんなに光る背を見せて走るのだらうか

この場面は刑事の来訪後、富岡が孔雀に関する夢想をするのだが、その直後に出てくる描写である。結婚してオペラ歌手になることを断念したが、それは本不意で、未だにオペラの練習をしているらしい。しかし、その声は既に「衰へ」ている。

注目すべきはこの細君の「衰へた」「咽喉」が犬の「遠吠え」に譬えられている点であらう。さらにそれは「夜ふけの藪のざわめきの間を、どんなに光る背を見せて走るのだらうか。」とあり、藪の中を走る「光る背」に譬えられている点である。この「遠吠え」は実は作品のラストシーンに出てくる。

・犬の遠吠えがきこえ、これに応へる遠吠えがあつて、間もなく止んだ。

刑事は突然、富岡に肩をゆすぶられて、身を起した。富岡の目はかがやいてゐた。

「ごらん。私の言つたとほりだ」

(略)

刑事は双眼鏡をとりあげて、目にあてた。その細身の男は、黒い服を着て、犬の鎖を両手に引いてゐた。ふと月に照らされた白い顔を見て、刑事は声をあげた。それはまぎれもなく、富岡家の壁に見た美少年の顔である。……

この箇所だけを見れば、ただ何となく、読み過ぎてしまふ「遠吠え」も先の引用箇所の「遠吠え」と対応させると、実に、おもしろい事実が発見できる。

先の「遠吠え」は、細君の今は「衰へた」「咽喉」の譬えであり、結婚後、オペラ歌手を断念したものの、まだその夢に固執している、ある種の悪あがきの執念をあらわすものであると指摘した。もう一步進んで言う、先の「遠吠え」は、美に参与していた細君が今や美の側から離脱せざるを得なくなつたものの、未だ美の側に執着しているその執念をあらわしているとも言えよう。もう、おわかりであろう、細君^①の美への執念は夜な夜な「野犬」に姿を変え、孔雀を殺しに行くのである。言い方を換えると、この作品において孔雀を殺す「野犬」は、細君の美への執念をあらわしていると言えるのだ。

さらにこの考えを押し進めると、その「野犬」が孔雀を

殺す動機が解る。

細君が「衰へた自分の咽喉を試す」のは、「不機嫌な夜にかぎつて」であるが、この細君の「不機嫌」さは何なのか。刑事が帰つた後、引き続きの「3」節の場面で富岡の夢想が描かれるのだが、その最後の箇所^②に先の引用箇所が来る。つまり、「2」節と「3」節に描かれる事は同じ日の晩に起こつた事であり、先の引用箇所も刑事の来訪と同じ日の晩の描写である。どうやら、引用箇所に含まれる細君の「不機嫌」さは何なのかは、「2」節で展開された刑事の訊問の場面に手掛かりがありそうである。「2」節には「不機嫌」に類似した概念として細君の「不快」という感情が描かれる。

・細君とはいふと、はじめはあんなに高圧的であつたのに、訊問が良人に移つてからは、不快さうに顔をそむけて押し黙り、しかも座を立たうとはしなかつた。

(略)

ただ彼女は一途に不快で、おしまひには刑事も、それが自分のせみだとはかり思へなくなつた。一刻も早く孔雀の話題を片付けてしまひたいといふ焦燥が見え、そんな埒らぬ男二人の問答を、ときどき軽蔑の目で高所からちらと見やつた。

刑事は最初、自分の訪問が細君を「不快」にさせていると思っていたが、「ただ彼女は一途に不快げで、おしまひには刑事も、それが自分のせみだとはかり思へなくなつた。」とあり、別の理由が細君の「不快」さにあると判断するようになる。この一文の直後に「一刻も早く孔雀の話題を片附けてしまひたいといふ焦燥が見え」とあり、どうやら孔雀の話題ばかりする事にその原因があるらしい。細君は何故孔雀の話題ばかりする事を「不快」に思うのであろうか。

孔雀が美の象徴であり。美の盛りであるとすれば、オペラ歌手を断念せざるを得なくなり、結婚した細君、換言すれば、美から既に隔たりを置かれた細君にしてみれば、美の盛りである孔雀は妬ましい存在であることはわかる。それは、わかりやすく言うと、既にピークを過ぎたベテラン女優が勢いのある新人の女優を妬ましく思う感情と言つたらよいであらうか。

つまり、人気（男二人の話題）が自分ではなく孔雀に集中していることを妬ましく思っているのである。人間が動物である孔雀に嫉妬するといふ感覚は、一見わかりにくいだが、夜な夜な「野犬」に変身する細君にしてみれば、意識の上では無いにせよ、孔雀は同じ視線で捕えられる存在な

のだ。要するに、細君のこの「不快」は話題を集めている孔雀に対する嫉妬の感情だと言える。

先にも述べた様に、細君が「不快」に思つたこの夜と同じ夜の場面が「3」節の先の引用箇所である。したがって、引用箇所の細君の「不機嫌」は、この「2」節の「不快」から引き継いでいる感情と言えよう。その上で、この「不機嫌」が「衰へた自分の咽喉を試す」きっかけになっている事を考えると、この「不機嫌」さの内実が分かる。一言で言うとそれは孔雀に対するライバル心とでも言おうか。ただしそれはすでにオペラ歌手になることを断念した後の悪あがきのライバル心である。

細君の「不機嫌」さはそのような、孔雀という美の盛りから既に隔たざるを得なくなった腹立ちとその腹立ちから来る悪あがきのライバル心と言えようか。細君にしてみれば、さしずめへ私もかつては孔雀のように美しかったのに」といった所か。

こう考えると、野犬が孔雀を襲うという事の意味が分かる。つまり、細君の孔雀に対する嫉妬心から来るライバル打倒という事なのだ。ただし、しつこいがそれは細君の歌声が「遠吠え」となっているように、すでに美から隔たった後の、悪あがきにも似たものである。この事は、「野犬」という獣に姿を変えている事でもわかるだろう。

(1)

- ・磯田光一「文芸時評・困難な美と悪の救済」(『図書新聞』一九六五[昭四〇]・一・三〇)
 - ・福田宏年「耽美的な短編集」(『日本経済新聞』一九六五[昭四〇]・九・六)
 - ・磯田光一「失われた過去の再建・『三熊野詣』」(『日本図書新聞』一九六五[昭四〇]・九・二〇)
 - ・落合晴彦「繚乱たる頽廃」(『図書新聞』一九六五[昭四〇]・九・二五)
 - ・「書評」(『朝日新聞』一九六五[昭四〇]・九・二八)
 - ・磯田光一「三島由紀夫入門」(『国文学 解釈と鑑賞』一九六六[昭四二]・七)
 - ・高橋睦郎「解説」(一九七一[昭四六]・二・新潮文庫)
 - ・清水昶「三島由紀夫 荒野からの黙示」一九七〇[昭四五]・一〇 小沢書店
 - ・堀江珠喜「ファルスとしての犯罪小説」(『神戸論叢』一九八四[昭五九]・八)
- (2) 『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』、『サンケイ新聞』、『日経新聞』、『東京新聞』、『神奈川新聞』の事件に関する報道を表にまとめると次のようになる。

昭和39年	朝日	読売	毎日	サンケイ	日経	東京	神奈川
第一回報道	10・3 (夕刊)	10・3 (夕刊)	10・3 (夕刊)	10・4 (朝刊)	10・4 (朝刊)	10・4 (朝刊)	10・4 (朝刊)

第二回報道	10・18 (夕刊)	10・18 (夕刊)	10・18 (夕刊)	10・18 (夕刊)	10・18 (夕刊)	10・18 (夕刊)	10・19 (朝刊)
特集記事	10・19 (朝刊)						
第三回報道 (犯人断定)	10・20 (朝刊)	10・20 (朝刊)	10・20 (朝刊)	10・20 (朝刊)	10・20 (夕刊)	10・20 (朝刊)	10・20 (朝刊)

また、週刊誌では

- ・「サンデー毎日」(一九六四[昭三九]・一一・八号)
- ・「横浜ドリームランドの姿なき『通り魔』」
- ・「週刊朝日」(一九六四[昭三九]・一一・六号)
- ・「クジャク殺しの『ホシ』」(「エンピツ便り」というコラムとして)がある。
- (3) 『三島由紀夫全集』(一九七六[昭五一]・一 新潮社)
- (4) 『三島由紀夫全集』(一九七六[昭五一]・一 新潮社)。
以下「孔雀」の本文は同じ。
- (5) 「作者」、「作家」といった呼称に関しては色々議論があるうが、本稿では、以下「作者」を「三島由紀夫」という意味で使う。
- (6) ちなみに、当時の物価で同じく「五十万円」位のものを「値段史年表 明治・大正・昭和 週刊朝日編」(一九八八[昭六三]・六 朝日新聞社)で挙げると、昭和三十八年で乗用車の「ブルーバード」が「五十八万三千円」、同年の総理大臣の給料が四十万円。昭和三十九年の都知事の給料は

「五十万円」。ちなみに公務員の初任給は昭和三十九年で「一万九千百円」である。

また、当時起きた、誘拐事件の身代金に関しては、昭和三十八年の「吉展ちゃん誘拐殺人事件」が五十万円。同年埼玉で起きた「狭山事件」の身代金は二十万円。昭和四十年、新潟で起きた「新潟デザイナー誘拐殺人事件」の身代金は七百万円である。

(7) 一回目の事件の時に野犬説が浮上しなかった理由としてまず考えられるのは、「現場の鳥舎内にも足あとがいろいろ乱れ、それが「犯人のものか」識別するのは困難だった」(『サンデー毎日』)ことと犬が金網を破る訳がないと云う先入観である。しかし、そうした事件現場の状況だけでは無いようだ。というのも当時の新聞の地方版には事件の前後に「野犬被害うなぎのぼり、野毛山公園、すでにヒナ羽、ワナ仕かけて襲来ふせぐ」(『サンケイ新聞』横浜版 一九六四「昭三九」・九・一九)、「犬の小暴力」月に100件、横浜、被害急増から捕獲作戦」(『東京新聞』京浜版 一九六四「昭三四」・一〇・六)、「大規模な「野犬撲滅作戦」、戸塚区保野・和泉・汲沢町一帯、目にあまる被害、戸塚保健所、こんどは鶏舎襲われる」(『サンケイ新聞』横浜版 一九六四「昭三九」・一〇・二八)といった記事がみられ、また、警察は二回目の事件の直後に聞き込みをし、「近くの農家でニワトリが野犬に襲われる被害が五、六件あった」(『サンデー毎日』)と、野犬、単独の仕業であることの裏付けをとっている。このような地方の状況を警察が知っていれば、一回目の事件から野犬説が浮上していても不思議ではなかった。が、そうならなかったのは当時の世相が関わっているようだ。全国版の新聞で

は一回目事件を「少年通り魔事件」や「白鳥バーベキュー事件」と関わらせて報道している。例えば昭和三十九年十月四日の『東京新聞 朝刊』には「戸塚署では「通り魔」と同じような変質者か精神異常者の犯行とみて捜査を始めたが、昨年芦ノ湖畔であった白鳥のバーベキュー事件以上のショックと神奈川県警や関係者は嘆息している」とあり、他にも『読賣新聞 朝刊』(一九六四「昭三九」・一〇・一九)にも同様の記事が見られる。つまり、「オリンピックで世の中がなんとなく浮かれ騒ぎ、はなやいでいる」(上、本明寛氏記事)世相の裏ではこのような陰惨な事件が起きていた。地元で野犬騒動が持ち上がっていたにも関わらず、警察が一回目の事件が起きた当初、野犬説を考えなかったのはこうした世相に引きずられたという事もあり得るのではないか。

(8) 「背徳の倫理」―「金閣寺」三島由紀夫(『国文学 解釈と鑑賞』一九六七「昭四二」・四〇六)

(9) 次の箇所にも月のイメージが見られる。

「むかしの客船の赤道通過の証明書が額になつてゐて、それに人魚や海神が躍つてゐたり、月夜のやうに青いデルフトの和蘭風車図の陶額があつたりする。」

「富岡家を辞して、署まで自転車で帰るあひだ、彼の脳裡からは現実の疲れ果てた富岡の顔が消えて、次第にあの絶世の美少年の面影ばかりがひろがるのにおどろかされた。月の出てゐない晩であるが、幻のその面輪が月のやうに刑事の眼前にちらついた。」

「空には雲がところどころにあいまいに凝つてゐたが、風はなく、山の端がおぼえてきて、赤らんだ満月が昇つた。月のはのぼるにつれて赤みを失ひ、光りを強め、孔雀小舎の影は

あざやかに延びた。」

- (10) パンフレットはサイト「Dream Memories」(<http://members.com.home.ne.jp/dream41830/dreamindex.htm>)に拠る。また、前掲の久保田裕子氏の論文に、「正確な日時は確認できなかったが、職員の前後に子供と一緒に同園を訪れている」とある。

- (11) 拙論『孔雀』と能楽」(『京都語文』二〇〇〇[平一])・三) 参照

- (12) 人間の魂が睡眠中、いろいろな小動物の姿になって、ふらふらと肉体を遊離するという信仰は、ヨーロッパ、インド、中国、日本で、昔からたくさん知られている。ヨーロッパでは例えばグリム兄弟の集めた『ドイツの伝説』の第四百五十五話にこの種の話がある(前川道介『ドイツ怪文学入門』一九六五[昭四〇]・一一 綜芸舎)。この話では、昼寝中、兵士の魂が白いイタチに変身する。日本では柳田国男がよく書いている「ダンブリ(トンボ)長者」の話がこの種の話にあたり(柴田宵曲『妖異博物館』一九六三[昭三八]・一 青蛙房にこの話が紹介されている)。ちなみこの著書は島崎博・三島瑠子共編『定本三島由紀夫書誌』一九七二[昭四七]・一 薔薇十字社「第五部 蔵書目録」に記載がある。
- (13) 孔雀殺しの動機がこのような嫉妬であることは当時、事件を報道した記事にも見られる。

・「通り魔」と同じよう 初期の精神病者の犯行

早大助教授(心理学) 相場均氏の話 おそらく精神病患者が精神病者でも初期のものの仕わざだろう。(略)

人気のあるものをこわしてしまいたいという気持ちは一般人にもあるが、程度の問題だ。

『東京新聞』朝刊 一九六四[昭三九]・一〇・四
・殺人と同じ残忍さ
でき心と思えぬ計画性

本明寛氏(早大教授・性格心理学)「(略) オリンピックで世の中がなんとなく浮かれ騒ぎ、はなやいでいるので、こういった世相に対する反感、あるいは美しいものに對するうらやみの感情が、『よいものへの報復』という形であらわれたと見るべきだろう。」

(略)

弱いもの、しかも美しい大量のクジャクに対する攻撃という点で、犯人たちは女性的な性格の気の弱い、若い男たちだろう。それも、人をうらやんだり、ねたんだりする「ヒステリー性性格」のもので、放火犯人と似ていると思う。

芦の湖のバーベキュー事件には「ふとしたでき心」という傾向が強かったが、こんどの犯人たちはもって残忍だ」

『讀賣新聞』朝刊「クジャク殺し 私はこちらみる」一九六四[昭三九]・一〇・一九